

読書への誘い

＜第Ⅲ期 第 19 号＞通巻 1 1 4 号

1 1 月になってようやく秋晴れが見られるようになりました。ちょうど今は、この辺りの桜の葉の色づきがきれいです。休日には本を片手に、ちょっと遠くまで、足を運んでみましょうか？

秋の夜の会話

草野 心平

さむいね
あさむいね
虫がなっているね
ああ虫がなっているね
もうすぐ土の中だね
土の中はいやだね
瘦せたね
君もずいぶん瘦せたね
どこがこんなに切ないんだらうね
腹だらうかね
腹とつたら死ぬだらうね
死にたくはないね
さむいね
ああ虫がなっているね
(詩集『第百階級』・1928 年刊)

『パーク・ライフ』(吉田修一著・文春文庫・2004年刊)

公園にひとりで座っていると、あなたには何が見えますか？ スターバックスのコーヒーを片手に、春風に乱れる髪を押さえていたのは、地下鉄で僕が話しかけてしまった女だった…。何となく見えていた景色が切ないほどリアルに動き始める。日比谷公園を舞台に、男と女の微妙な距離感を描き、芥川賞を受賞した小説。

日比谷公園の地下には、三つの路線が走っている。この辺り一帯を、たとえば有楽町マリオンビルを誕生日ケーキの上飾りに譬え、上空から鋭いナイフで真っ二つに切ったとすると、スポンジ部分には地下鉄の駅や通路がまるで蟻の巣のように張り巡らされているに違いない。地上のデコレーションが派手でも、中身がすかすかのケーキなど、あまりありがたいものではない。

改札を抜けて、清掃中の濡れた床に注意しながら日比谷公園出口へ向かった。まっすぐに延びる地下通路の天井は低く、歩けば歩くほど自分の身長が縮んでいくように思える。途中、振り返って見たが、一緒に電車を降りたはずの女の姿はそこになかった。日比谷線の車内でちょっとしたハプニングが起こった。しばらく霞ヶ関駅に停車していた電車が、説明のアナウンスも特にないまま空調を切り、全く動かなくなってしまったのだ。場所が場所だけに何か異臭がしないかと辺りを嗅ぎ回りたいくなる。どれくらい停まっていたのか、僕はドアに凭れたまま、ガラス窓の向こうに見える日本臓器移植ネットワークの広告をぼんやりと眺めていた。広告には『死んでからも生き続けるものがあります。それはあなたの意志です』と書かれてあった。よほどぼんやりしていたのだと思う。すでに六本木駅で電車を降りた先輩社員の近藤さんが、まだ背後に立っていると錯覚していた。

「ちょっとあれ見て下さいよ。なんかぞっとしませんか？」

ガラス窓に指を押し当て、僕は背後に立つ見知らぬ女性に笑みを向けてしまった。辺りの乗客たちが一斉に僕を見た。突然話しかけられて、その女性もきょとんとした。しかし、乗客たちの間で失笑が起ころうとしたとき、「ほんとねえ、ぞっとする」と、その見知らぬ女がガラス窓の外へ目を向けて、平然と僕の問いに答えたのだ。今度はこちらがきょとんとなった。

「……死んでからも生き続ける私の臓器ってイメージがちょっと怖いっていうか、不気味な感じがするよね」

女は続けてそう言った。まるで十年來の知り合いに話すような口ぶりだった。赤面で済んだものが、腋の下にじとっと汗まで滲んだ。乗客たちは、しばらく言葉を交わしていなかっただけで、この二人は知り合いなのだ判断したらしく、すでに興味を失っていた。

電車はその後もしばらく停車したままだった。女は何ごともなかったかのように、中吊り広告を眺めはじめ、僕は僕で、なるべく目が合わないようにガラス窓に顔をはりつけ、早く動いてくれ、と心の中で祈った。

細い地下通路を抜け、日比谷公園出口への階段を駆け上がる。店舗営業の途中に、ほとんど毎日この階段から公園へ出ているのだが、この通路で誰かとすれ違ったという経験がない。地下鉄の出口にも、数寄屋橋口のような花形もあれば、ここのように人気のない出口もあるのだろうが、こう毎回一人きりだと自分の名前がこの出口についてもおかしくはない。

薄暗い階段を昇りきると、公園派出所の裏に出る。公衆便所脇の低い柵を跨ぎ、園内に入り込めば、地下鉄構内の空気とは違い、土や草いきれが鼻孔をくすぐる。園内では、なるべく俯いて歩くことにしている。遠くのものを見ないようにしながら、心字池を囲む雑木林の小路を足元だけを見つめて進み、イチョウ並木、小音楽堂を抜けて大噴水広場に入る。広場には死にもの狂いで餌をついばむ鳩たちがいる。踏まないように広場を横切り、噴水を囲むベンチの一つにゆったりと座る。このときすぐに顔を上げてはいけない。まずネクタイをゆるめ、地下鉄の売店で買ってきた缶コーヒーを一口だけ舐める。顔を上げる直前に、数秒だけ目を閉じた方がいい。ゆっくりと深呼吸をし、あとは一気に顔を上げて目を開く。カッと目を見開けば、近景、中景、遠景をなす、大噴水、深緑の樹々、帝国ホテルが、とつぜん遠近を乱して反転し、一気に視界に飛び込んでくる。狭い地下道に馴れた目には少し酷だが、頭の芯がクラクラして軽いトランス状態を味わえる。なぜかしら、涙が込み上げることもある。ただ、その涙に理由をつけようとすると、逆にずっと何かがさめて、すぐに涙は乾いてしまう。…

六本木店に新製品のポスターを届けに行った近藤さんを待つ間、広場にいる鳩の数と、ベンチや噴水の縁に腰掛け、陽気のいい午後を無為に過ごしている人たちと、どちらが多いのだろうかなどと数えながら、陽に三本しか吸わないたばこの一本を吸っていた。…

近藤さんと肩を並べて、心字池のほりを歩いた。なにげなく見上げた低い崖の上に、いくつかベンチが並んでいる。退屈そうにたばこを吹かす営業マンらしき中年男の隣に、見覚えのある女の姿があった。一瞬、視線はその先の大樹へと進んだのだが、「あっ」と声を上げ、改めて視線をそこへ戻した。とつぜん立ち止まった僕の肩に、近藤さんの肩がぶつかった。「な、なんだよ？」とその肩を叩く近藤さんの力に押されて、僕は心字池のほりを駆け出していた。

「お、おい！」

後ろから近藤さんの声が追ってきたが、「ちょっと待ってて下さい！」と叫び返し、崖の上へのぼれる派出所裏の石段に向かった。

(pp.9-20)

